
青い月

紅姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青い月

【コード】

N9369T

【作者名】

紅姫

【あらすじ】

異世界召還から無事？帰還することは出来たが未だに性転換したまま・それに問題のありそうな依頼もくるし、一体どうなっちゃうの？

探偵さんの助手

車の走る音が遠くから聞えてくる。

しばらくして、少しづつ日が昇り一日が始まる。

ピピピッ・・・携帯電話がアラームを鳴らし始めた。

・・・

・・・

・・・

ガバツ！

2011年7月22日 AM7:22分

携帯電話の持ち主は急いで着替えて仕事に向っていった。

東京都豊島区東池袋付近で紹介された地図を右手にもって、番地を見ながら見つけた雑居ビルに入っていた。

その雑居ビルは5F建てになっており、3Fがどつやら目当ての仕事場らしい。

3Fは合計で4つのテナントが入れるようになっていたのだが、3つは空き部屋になっていた。

不景気な事もあり、テナントが入りにくいのだろう。

1社入ってるプレートにはこう書いてあった。

【剣山探偵事務所】

それを見ながら昨日紹介された時の事を思い出していた。

.....

2011年7月21日PM22時24分

定時制の高校の授業が22時に終わった帰り道

ピピピピッ・・・ピッ

「はい、鈴木すずきです。只今大変忙しい為、要件がありましたらピーッとなつた後にご用件を録音してください」

「言葉で濁してもダメですよ、雪ゆきさん」

「さんじゃなくて君です!」

「いいじゃないですか、今はまだ女性なんですから」

「はあ、それで剣山けんざん充みつるさん何か御用ですか?」

「いえ、実は、アーカムで雪さんが女性の体の間、戸籍を女性にした手間賃を返してもらおうかと電話したんですよ。」

「で、何を手伝えばいいんですか？」

「ええ、一応金一封は出ますのでその辺は安心してください。それでは詳細をメールで送りますのであとで見てくださいね」

ブツ、ツーツー

送り先

剣山充けんざみつる

宛先

鈴木雪すずきゆき

題名

お仕事幹旋

本文

私、剣山充の娘が探偵事務所を開き、初めての仕事の依頼が入ったよう。

初めての仕事という事もあり、仕事のパートナーを募集しても集まらなく、一人で今回の仕事をこなすと聞かない。

今回の依頼人の鳥場盛名とりばせいめいが依頼した調査場所は、長野と岐阜にあるとある小さい集落の調査らしいが、その集落の辺りでは奇妙な磁場の乱れがアーカム財団アマテラスの気象衛星にて確認されているとの事。

出来れば、娘にはばれない様に、護衛をしてほしい。山間の村の為、電波が届かない可能性があるが、電話線は通ってる為連絡自体は問題はない。

危険が迫ってる場合はすぐに撤収してほしい

娘の剣山薫けんざかあるには父の仕事場の後輩という形になってる

という公私混同もはなはだしいメールが届いていたんだが・・・

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

ガチャ・・・ボタン！

「失礼します。」

「あら？女性の方？鈴木 雪さん？」

「はい、今回の集落のお仕事の手伝いを頼まれて・・・」

「そうなの、ごめんね。父が折れなくてね」

「支度はもう出来てるからいきましょうか？」

「はい！」

そのまま2個のポストンバックを抱えて、池袋西口にある日本レンタカーまで一緒に行き、レガシイの3ドアの車を借りて、首都高から中央自動車道そして伊那市で降り、国道361号から木曾ダムを抜けて一路山道を車で登っていった。

・

・

・

まさか、待ち受けてるモノが分かっていたら最初から仕事請けなかつたのにと思っるのはいつものパターンであったが・・・

登場人物・世界観編集

主人公 鈴木 雪

身長 155cm 現在は女性化してるため150cm 18歳

容姿 黒髪に黒眼 女性化の影響により腰まで届く黒髪 3サイズ

は上から88 58 86

見た目 容姿・声色が女の子 名実共に女性化

本人いわく将来は男の中の男になるとの事

特徴：101回の異世界召還後、異世界を立て直す為に女性化

趣味 ライトノベル・深夜アニメが大好き

能力 何故か知らないが、アニメ・ライトノベル・ゲーム世界など架空世界に召還される事が多く、生き抜くために仕方なく多種多様の技を身につけている。

嫌いな物 作者と同じくホラー系のアニメ・ゲーム・特撮物は夢に出てくるから苦手。ちなみにバイオハザードすら怖くて出来ません。
主武装武器

《魔降剣》&《至高剣》

概念物質より作られた剣。短時間で消えてしまいが切れ味&硬度はモース硬度27のナイフすら切り裂く。

剣山 充

職業 アーカム研究所日本支部副所長

身長 180cm

容姿 典型的な日本人 痩せ型

趣味 とくになし

剣山 薫

職業 私立探偵事務所所長 充の娘

身長 168cm

年齢 24歳

容姿 黒髪黒眼 髪はセミロング 3サイズは上から92 59
88

舞台 長野県L村神無

昔から神隠しなどの失踪事件が起きてるといふ村 謎の偶像など謎が多い

神無のみに伝わるお祭りがあるそうだが？

村と掟と生贄（前書き）

また、問題事が起きそうな、気がしながらも車の中で熟睡してた主人公 雪はたして？

村と掟と生贄

薫さんの運転する車、レガシイは一般的な日本の車だけあって山道はかなりきつかったが・・

なんとか神無村に到着した。

東京を出発したのが午前11時過ぎだったので、高速を乗り継いでドライブスルーで一回休憩を挟み村についたのはすでに夕方になっていた。

村にある民宿に剣山さんが話を通しておいてくれたおかげで今日はそこに泊ってから明日から調査をすることになった。

「ふう、それにしても随分、自然が多いところですね。」

薫さんへ話を振りながらポストンバックを持って、周りを見ていく。なんだ？霊的にこの村おかしいぞ？なんらかの霊的方陣が掛けられてる？

まったく、面倒なことにならないければいいけどな・・・

そのままポストンバック2個と自分自身の荷物を民宿の借りてる部屋に置いて宿で出された夕食を食べていた。

「薫さん！私、鮎食べたの初めてですよ！」

注 筆者も鮎を食べたことは一回しかありません。

「え？そうなの？」

「そうなんですよー」

「ふうん、そういうえば雪さんは着替えの洋服とか持ってきてないみたいだけどどうするの？」

はい、いま気づきましたwそういうえば、女性って着替え一杯必要なデスヨネ。貧乏学生の自分にとって購入するのは買いにくいので恥ずかしいので普段はネットで代金引換で全部買ってます

「え・・・？」

「えっと、剣山さんからお仕事の内容が泊りって聞いてなかったの・・・」

ちょっと所か、かなり苦しいか？

「やっぱり。そうだと思ったのよね、うちの父ってそういう所結構省くから大変でしょ？」

ええー大いに大変ですよ。それに服をいつも持って着てないのは安全な日本と違って異世界召還が多いのでそんなに嵩張る服なんてもって移動できないってのが大きい理由ですよ。

だからついつい、洋服とか余分に持ってくるのを忘れるっていうかw

「実はね、雪さんの分の洋服と寝巻きもってきてるから使ってるね。あと下着も見た感じなんとかいけそうだから使ってるね」

「ありがとうございます。」

剣山副所長、あなたの娘はとってもやさしくて人間できてるよ。少しは見習えよなー

「それじゃ、雪さんお風呂にいきましょう」

注 お風呂シーンはカットだよ！

「ふう、いいお風呂だったね、雪さん。」

「ですねー」

くそ、女性の体になってからと言う物、女性の裸を見てもなんとも思わない俺がくやしい・・・

「そういえば、雪さん今回の依頼の内容なんだけどね、一週間前に失踪した10歳くらいの女の子を探してくださいって依頼なの。」

「で、失踪した当時っていうのがお祭り一週間前にここに宿に止まった家族連れの人がいたんだけど、外で女の子が遊んでたのを母親が確認して数分後に迎えにいったらいなくなってたらしいの。」

村人総出で探して近くの村役場の人・警察も200人体制で3日探したんだけど成果はなし。

いまま定期的に警察と役場の人も探してるらしいけど、いまだに見つかってなくて、私の大学のOBでもあるから後輩が探偵事務所を開設したって聞いて、藁にも縋る思いで依頼してきたって訳なの。」

「だから、一緒に探しましょう。」

「わかりました！」

というか今の話、おかしくないか？警察200人体制で見つからないののうちら二人に任せるのとか、どう見ても200人も探した後とかないしそんな人数で探してたら周りの草とかもつと倒れてないか？

というかそんな失踪が本当にあつたら、こんなのかな感じじゃないだろw

「雪さんとりあえず、そろそろ寝ましょうか・・・」

「はい！おやすみなさい」

しばらくしてから、薫さんが寝付いたのを確認してから、魔法を展開させる。

《光気絶対防御陣》

薫さんを中心に不可視な光の陣が展開される。

そのまま音を立てずに部屋を出ていく。

民宿の中は真っ暗になっており、かなり怖かったりするw

ちなみに今は、ここの民宿の浴衣を着てる。

そのまま、民宿の浴衣の分子を分解。構成しなおし見た目は浴衣だけど能力値は魔法戦闘服にする。

丹田を通して気を昇華し、2Fの窓を空けて飛び降り、音を極力立てないように《サイレント》の魔法を周囲に展開しながら降りた。

さっきの薫さんの話から気になった点が「っていうのがお祭り一週間前にここに宿に止まった家族連れの」と言う所だ。

つまり一週間後に依頼をかけてきて今日、ついたって事はお祭りは今日ってことになるんだが、昼間にここについたとき、お祭りをしてる様子はなかった。

すでに矛盾だらけなわけだが、バカな私でも分かるって事はあの切れ者の副所長の事だ・

絶対何か掴んでるに違いないな・

とりあえず、昼間の違和感があった場所の調査を一人ですることにし、風の精霊を使い、周囲に人がいないかを確認していく。

宿の中には気配が1つて事は薫さんだよな・

この周辺1km範囲には気配なし。

しばらく離れた所で数百の気配を確認した。

おい、まで、手元のソフトバンクの携帯電話の時間を確認する。午前2時半・・・

この時間にお祭りつて嫌な感じがするんですがー

「風よ。」

そのまま、風を纏いなら上空を移動していく。

先ほど感じた場所まで来ると多くの人がお面？をつけて何かをしているようだった・・・

それに伴い周りの精霊の様子もおかしい。

仕方ない・・・一度目を閉じ再度開ける。

目の中心に幾何学模様の朱色の五芒星が浮き上がってくる。

アルファステイグマ
《複写眼》

そして、周りの空気の流れ、なんらかの儀式をグラフで数値で表していく。

解析終了

パターン 儀式 異世界神への生贄 呪われた者 多重する世界
生と死 外界との断絶

・・・また面倒な・・・

って生贄って！

儀式をしてる連中を見ていると、一つの神棚に一人の10歳くらいの女の子が見えた。

あれか・・・

その女の子に一人の170cmくらいの男性が50cmほどの狩猟用だろうか？ナイフを片手に近づいていく。

あれは・・・やばいだろ！

その男性が女の子の前に立ちナイフを振り下ろす。

《瞬歩》

それと同時に少女と男性の間に割って入り、振り下ろしたナイフを人差し指と中指で真剣指先取りをした。

ざわざわという音が鳴る

「な・・・なんだ・・・きさま？」

そのまま、丹田を通し体中の筋力を一気に強化させていき、指先でナイフを押し折った！

「うああああ。御剣がああああ」

「きゃあああああ」

などたくさん悲鳴が聞えてくるが、

「おい、少女にナイフを振り下ろそうとするのは感心しないな。傷害罪だぞ?」

そういうとさつき、ナイフを振り下ろそうとした男は

「う、う、うるさい。村の古くからの掟を・・・大切な儀式を・・・なんてことをしてくれただ?」

「これでは、村に天罰が・・・」

まったく、どいつもこいつも・・・

「一応、ここは日本であって生贄とか殺人未遂だぞ?そんな事が許されるわけないだろ?」

「とりあえずこの少女は預かっていく。」

《複写眼》で見ても一般的な少女だ・・・問題は無い

「その娘!」

突然、娘呼ばわりしてそちらの複写眼で見るが・・・一人の女の形をした何かが映った。

「その娘は大事な者なのだ、掟は絶対でありここから返す気はない」
そう女が告げて命令をすると、50を越す男達が雪を囲った。

「まったく・・・」

一応、異世界と違って日本はいろいろと法律あるから後々の事考え
ると手荒い事はしたくはない
考えてるうちに

数人の男が鉈などを振り下ろしてきた。

《硬気功》

カキン！

「な!？」

鉈が全て皮膚と魔法戦闘服の上で止まっていた。

そうして、驚いてるうちに強化してる拳を石畳に思いっきり打ちつ
けた！

ドン!という音と共に石畳が粉碎され爆風が周りを覆った。

その間に少女を抱え上げて、爆風が晴れないうちに風の精霊の力を
使い上空へ退避した。

「くそ、いないぞ?どこにいった?」

「さっきの女、夕方うちの宿に泊った人に似てるわ」

「なんだって、すぐに手配をかけよう」

「早く生贄をささげて終わらせなければ村が・・・」

まったく自分達の為だけに生贄とか腐ってんな・

そのまま、宿に向った。

結界に封じられた村（前書き）

山深くにある、神無村に到着した瞬間。霊的な磁場もあるし、矛盾だらけの依頼だし、10歳の女の子を生贄にしようとするし、どうなっちまうんだ？

結界に封じられた村

しばらく少女を抱えて空を飛んでいると不思議な違和感を感じた。

「なんだ？」

そう言いながらも村にある宿舎が見えてきた。

ここまでの要した時間がわずが20秒足らず、儀式を行っていた場所から考えれば5分近く時間が稼げるだろう。相手が徒歩ならば・

先ほど空けた窓から宿舎に入り、薫さんが寝てる部屋に向う。

部屋に入り、薫さんが結界に守られながら寝てるのを確認した。

「薫さん！薫さん！」

少女を横に下ろし、薫さんの肩を押しながら揺らす。

「どうしたの？雪さん？ん？その子は？」

薫さんが寝ぼけた感じで話してくるが、今は時間がおしい。

「薫さん、この子が恐らく依頼にあった子です。この村はどこかおかしい。すぐに村から出しましょう。」

雪の切羽詰った感じが伝わったのか寝巻きのまま車のキーを持って宿の裏手に停車してある車に向う。

もちろん荷物と女の子は雪が抱えて車まで運んでいった。

「これで最後です、薫さん。早くいきましょう。」

「ええ、わかったわ。でもあとできちんと説明してもらっからね！」

「わかりました。」

精霊の力により周囲を調べると500mまで近づいてきているのが分かる。が村の出口は宿から近いいため、車に乗ってるこっちが有利。チエックメイトだ！

あとは、この子を依頼主に届けて、アーカム財団経由で警察を動かせばなんとかなる！

そのまま、車は村の入り口に向けて走っていく。村を抜けて少し走ると・・・

キキーツ・・・

なんだ！？急ブレーキかけて・・・？

その瞬間・・・違和感をさらに感じた。

「薫さん、どうしたんですか？」

薫さんは顔を真っ青にしたまま正面を見ていた。

私もそれを見た瞬間

「は？」

目の前は断崖絶壁になっており赤いナニカが波打っていた。

ここまで異常事態になるとすでに力を隠してる意味がない。すぐに車の外に出て、周囲を見渡す。

「なんだ？赤い？青い月だと？」

一度目を閉じ再度空け複写眼を起動。

海へ視線を移し、解析。

解析完了。異なる者 生命の海 死と生 永遠の牢獄 永遠の回帰

など断片的な情報しか入ってこない・

そのうち雨が降り始めた。

「雲がないのに雨だと？」

そのまま、雨も解析していく。

解析完了。人体に有害なる物質。体内に吸収された場合、その液体の量に応じて体内の人であった構成が外へと流れ落ちる。

「つまり人間やめるって事か？」

薫さんとか車から出たらやばいな・・・

青い月と赤い空を解析していくと、すでに外界から閉ざされており異世界だと言つ物がわかる。

「まったく、日本で異世界にいくとかどんだだけだよ！」

どちらにしても気化した液体が体に入るだけでも有害だな・・・

車の中に再度入り、

「薫さん、どうやら厄介ごとに巻き込まれたようです。これを肌身離さずもっていてください。」

ティア・フラット会長から貰った、お守りを薫さんへ渡す。

それと同時に後方から、人としては早い速さで追ってくる者を感じた。

「薫さん車からはなるべく出ないでください。あとこの女の子も見えてください」

「ええ、分かったけど、あなたはどつするの？私と大差ないのにずいぶん落ち着いてるのね？」

「まあ、アフガニスタンで傭兵してましたから・・・」

でっち上げの嘘です。でもこうでもしないと話聞いてくれそうにもなかった。

「それでは行つて来ます」

ガチャ・・・パタン

前方を見ながら、複写眼で解析していく。

向つていくモノは人では無かった。

うわ・・・《俺》ホラー系とかああいいうゲテモノ系とか嫌いなんだよおお

それと同時に思考を戦闘モード（バーサク）にしていく。

より冷静に、より正確に、より冷酷に・・・

もう一度見る、犬のように走っている人だったモノだ。

スピード、筋力、持久力をグラフで数値で確認していく。

常人の数倍の力をもっているよう。そのまま、人だった犬モドキが突っ込んでくる。

普通の人間ならこれでジ・エンドだが・・・

丹田を通して体内の筋力を強化し、硬気功にて肉体の表面を鉄ですら傷つける事の出来ない状態にしてる俺には無意味だ・・・

それに・・・いくら日本でも命のやり取りをしてくる相手に対して手を出さないほど俺はお人よしではない

よく言うが、撃つていいのは撃たれる覚悟のある奴だけだ。苛めや人を平気で傷つける奴が腐るほどこの世界・異世界通して存在して

るがそういう大半の奴は自分達がやり返される状況下に陥ったとき惨めなほど命乞いをする。

最初からそんな事をするくらいなら、人に迷惑をかけるなど言いたくなるが最近では人の立場になって物事を考える事が出来ない奴が多すぎる。

ナイフを持った奴が切りかかってきてそれを逆に刺し殺したら何が悪い？過剰防衛？意味がわからない。下手をしたら自分が殺されていたかもしれないんだぞ？そんな状況下に陥ってる人に対して過剰防衛とか言う奴こそ、偽善の博愛主義に毒されてると思う。

苛めをした奴もそうだ、学校で苛めをした奴が登校拒否や自殺まで追い込んでおいて、未成年だからって理由でヘラヘラして大した罪にも問われないで責任の有無さえ有耶無耶。逆に苛めをされてた相手に殺されたとか大怪我を受けたからってPTAや警察へ過剰防衛とかでよく訴える奴がいるが、本当に救えないと思う。今の社会形態は犯罪を犯した者に対して甘すぎる。そんな認識があるからいつまでたっても苛めや犯罪は無くならないと思う。

そんなどうでもいい事を思いながらも・・・

強化された拳をその犬モドキに打ち付ける。その途端、犬モドキが吹き飛び50m近く転がりながら動かなくなる。

それを車の中から窓ガラス越しで見ながら

「え？何？あの化け物みたいなの？それに雪さん、殴ってすごい吹飛ばしてたけどどういいう事？」

次々の犬モドキが雪に向ってくる。

「ちっ、メンドクサイな・・・」

そついいながらも次々に殴って吹き飛ばしていくが

「なんだ？さつき殴って吹飛ばした奴がまた立ち上がったと？まだ昏倒というか体内細胞自体粉々になってるはずなのに生きてるのか？」

「薫さんに現在の状況説明もしないといけないのに相手にしてる暇はないんだよ！！」

複写眼を使い、大気にやどる精霊を自分の存在の力と紡ぎ合わせていく。

『火の精霊達よ 怒れる炎の柱と化し 我が意志の命ずる存在を
焼きつくせ』

「かえんちゆうじん
《火炎柱陣》」

数十本に及ぶ炎の柱が回りに召還されて、一気に犬モドキを閉じ込め焼き払っていく。

精霊の浄化の力も含んでいる為、復活する事すら叶わない

数秒で炎の柱は消えるが、すでに周りには燃えカスすら残らない状

態になっていた。

「まったく・・・」

『大気に宿りし精霊達よ 風と為りて 我に力を与えよ 天使の名のもとに集い 全てを 悪しき存在より 解き放て』

「れいはてんじん《靈霸天塵》」

大気の風の精霊があたりの瘴気に覆われた大気を浄化していく。エリア指定は車から半径10mほどだから2時間はもつはずだ。

ガチャ・・・ボタン

「薫さん、お待たせしました。」

そう、雪さんから聞いていたけど、この細い体からあんな力が出せる事、突然地面から噴出した火など、とても普通の傭兵には見えな

い。
でも、さっき見ていた雪さんが戦っていたへんなモノは明らかに人ではなかった。

雪さんが強いからか、それとも常に冷静なのか知らないけど、普通の人はこんな状況下に陥ったらパニックになると思う。

そう成らないのは、雪さんのおかげかもしれないけど、一つ聞きたい事があった・・・

「雪さんは、さっき襲ってきた怪物とかじゃないですね？」

「ええ、違いますよ。普通の人間です。」

即答された・・・

「雪さん、なんでこの仕事に？」

そう、ここだ。なんで調査だけで父がこんな人を寄越したのか・・・

「簡単に言えば娘バカな親に脅されて、無理矢理ボディーガードを頼まれたって所ですね・・・あははは」

そうなんだ・・・

「ね、雪さん一体どうなってるの？なんであんなのがいるの？こいつって一体なんなの？」

聞きたい事を一気に聞くが、雪さんは少し思案していました。

「簡単に言えば、人を生贄にしてお祭りをしていた村ですね。それと今は、なんらかの霊的な力により元の世界と隔絶されています。その要因を取り除かないと脱出は出来ないのでしょね。」

その瞬間

オオーン、オオーンと言ったサイレンが聞えてきた。

雪さんはそれを聞きながら、眉を寄せていたけど、私には意味が分かりません。

「まあとりあえずは、その要因を私が取り除いてくるのでここで待機しててください」

「え？」

こんな意味の分からないところで待機？そんな・

「嫌よ！私も一緒にいく！」

「はあ、フランみたいな人だな・・・」

フランって誰？外人？女の人？

「なんか雪さんって話し方が男口調になってるんだけど、地がそれなの？」

「あーそつえば言ってませんでしたね、ある事件で女性になったまま当分これで過ごさないと行けないんですよ。だから元は男です。」

「

・・・

・・・

・・・

昨日お風呂一緒に入ったじゃん！一瞬で顔が赤くなるのを自覚してしちやた。

「薫さん、車の周りには認識阻害用の魔法陣と大気を清める精霊を展開させてあるので移動はしないでください。この世界に気化している物質を吸うと元の世界に帰れなくなります。冥界の食べ物や口

にしたら冥界の住人になってしまっただけで帰れなくなるって古今東西あります。それが同じです。ですからここからは移動しないでくださいね。」

そう言われてしまうと、頷く事しか出来なくなっていました。

「うん」

それと同時に女の子が目覚めました。

今更気がついたが女の子は結構前の型の服を着ている。色はピンクのワンピース。髪は肩まで伸ばし無造作に流している。

「ばば？ママ？」

そう言って泣いてしまった子を私は抱き寄せてあやしてあげた。

「ねえ？あなたのお名前は？」

泣き止んだのを見て、名前を聞く。

「菊池 桃花！」

クライアントに依頼されていた探していた娘さんの名前にピンゴだ！

「あなたのパパは、菊池健太郎さんでいいの？」

「うん！ばばの名前！」

「私の名前は剣山 薫よ、桃花ちゃんをパパに会わせてあげるからね。もう少し我慢しててね。」

「うん！えっとそっちのお姉ちゃんは？」

「俺の名前は雪だ！ゆきでいい。薫さんのいう事を聞いてまっけてくれ、すぐに戻ってくる。」

おっと忘れるところだった。

「あとあれだ、桃花ちゃん、お庭で遊んでたあとの記憶は残ってる？」

「ううん、わかんない。ずっとふわふわしてて気がついたらお姉ちゃん達がいたの。」

「そっか・・・」

ふわふわしてた？ってことは定期的に薬かナニ力使われていたのか？

「じゃ、薫さん行って来ます。くれぐれも車からは出ないでくださいね。」

ガチャ、パタン。

・・・

・
・

雪さんがそう言って、目の前から一瞬で消えたのを見て、夢のように感じたけど・・・手に抱いてるこの女の子は現実へ戻してくれていい。

その頃、雪は

風の精霊の力を使いながら上空から周辺を観察しながら情報収集のため、先ほどの宿屋に向った。

宿泊台帳（前書き）

結界により異界に閉じ込められた、雪と薫は大量の人だったモノに襲われた。それを撃退し、保護した少女が目を覚ました。どうして捕まっていたが聞いたが分からないってどういつ事だよ？こついつ時ゲームならヒントあるはずだろ！

宿泊台帳

眼下に、たくさんの無数の人であったナニカが見えてきた。

まったく、ゾンビとかグールかよ。そのまま空を移動しながら民宿の2Fから宿に入った。

風の力を使い、周囲を調べたが、宿の中には誰もいないようだった。

そのまま、音を立てずに入り口のカウンターまで移動。

「さてと、宿泊台帳はと・・・これか？」

そのままカウンターの影に隠れるように宿泊代長を確認していく。

宿泊客 2名様 代表者 剣山 薫様 予約を受けてないお客様。

2001年07月22日

10年前の日付？

どういう事だ？

さらに他の客を調べていく。

予約宿泊客 4名様 代表者 鳥場 盛名様 お連れの菊池様のお

子さんの桃花さんはお魚が苦手という事 2001年7月14日

なるほどな・・・

「つまり俺達は車でこの村に入った瞬間に霊的な磁場に捕まった
てことかよ」

その瞬間、正面玄関を破って、緑色の皮膚をした人だったモノが鉈
や鎌をもって入ってきた。

まあとりあえず、3人は逃げおおせたってことか・・・

そのまま、首をコキコキ鳴らしてそちらへ近づいていく。

まあこれが普通の少女とか女の人ならこのシュチュエーションでこ
んな冷静じゃいられないんだけどなーと考えながら・・・

近くによつてきた一人の男が服を掴んで千切ろうとしてきたが、ピ
クともしない・・・

「があああああ」

と言いながら人間離れし力で再度引き千切ろうとしてくるがそれを
上回る俺の腕力がそいつの右手を服から引き剥がして宿屋にはいつ
てきた奴らに向つてぶん投げた。

そのまま、そいつは数体の屍にぶつかっていき動けなくなった。

まあ用途的にこいつら屍って感じだから屍でいいか・・・

今の騒ぎに気がついたのかたくさん武器をもった屍たちが近づいてくる。

その中には羽の生えた者、犬のような者、蜘蛛のようなモノがいる。

薫さんたちに行かないように派手に陽動と言う名の破壊をすることにする。ぶっちゃけ10年前ならすでにここは本当に異世界であり、多少無茶をしても問題ないって事だ・・・

まあ悪いが・・・普段、定時制の学校に行っていると男しかいないこともあって昔から胸意外は見た目女だけな事だけあって、男がべたべた触ってくる事が多かったが、さらに最近は名実ともに女になっってしまったこともあっていやらしい視線や、過度なスキンシップなどストレスが貯まりまくりだった・・・

そして極めつけはこんな山奥まできて異世界だ？こんなメンドクサイことを押し付けてきやがってーと怒りがフルゲージMAXですよ。

そんな事もあってちょっと本気だしちゃてもいいよね？って思うのは仕方ないよね・・・

存在の力を魔力へと変換し複写眼にへ構築していく

『全ての力の源よ、輝き燃ゆる赤き炎よ』

赤い炎の粒子が手に集まっていく。

その間も屍が近づいてくるが・・・

『我が手に集いて蓮獄となせ』

「バースト・フレア
《烈火球》」

宿屋とその周辺を巻き込んで3百メートル範囲で大爆発が起きた。

ほとんどの屍はそれにやかれ空を飛んでいた者も爆風により吹飛ばされ地面に叩きつけられる。そのあと発生した爆炎により次々と焼きつくされていく。

わずか1分で付近にいた屍は魔法の余波・影響を受けて燃やし尽くされていた。

村の中心の役場へ向けて歩いていくが、途中にある川を見た。

「なるほど・・・流れてるのがすでに何らかの液体なんだ・・・」

「まったく、面倒なことだな・・・」

「そういえばさつき生贄の儀式をしようとした神棚の場所・・・何かヒントとかないのか？」

そのまま風の精霊を使い、上空へと移動。

何匹もの羽の生えた屍が空を飛んでいたがこっちは遙か上空にいる為気づかれないようだった。

それと同時にやっと最初の違和感に気づいた。

この村は電柱が全部木で出来てるんだ・・・いまコンクリート主流だろ？

とんでもない事を思いながらも生贄の儀式を行っていた神棚へ向かっていった。

派生と輪廻

風に乗りながら怪しげな儀式をしていた神棚の頭上まで移動していた。

「上空から、神棚付近を見ても特に異常は感じられないな。」

まあこの世界事態異常だけどなと心の中で突っ込む

ふと、白い影が目に映った。

「なんだ？人が・・・？」

すぐに風で調べるが残留思念のようであった・・・それに近づき声をかける

「ちよつといいかな？」

その白い者はこちらを振り返り見た。結構な美人・・・

「誰ですか？」

「村の者ではない。この異常な状態に巻き込まれたんだ。出来れば何か教えてもらえるか？」

しばらくその思念は考えていたが

「私の名前は……です。私の母が異界から来た神を復活させようとして私を生贄にしようとしてしました。それを私が……与えた……が……を持って……を勿ねて倒しました。ですが、母は、それをもって別次元へと消えました、その派生で出来たのがこの世界です。」

「つまり、この世界にはその異界からの神がいるってことか？」

「はい……ですが、その神は強い……恐らく、失われてしまった……が無いと倒せないでしょう……。」

「それはどこにあるんだ？」

「一人の……若者に託しました。今……その少年は一人で異世界で戦っています。……この世界を救う事は難しいでしょう……。」

「それでは最後だけ聞くんが、その神とやらを倒したら元の世界に帰れるのか？」

「この異界を……する……者がいなくなってもまた派生すれば……むずかしい……。」

「すまなかった、もう休んでくれ」

そう言い、再度空に退避した。退避した理由は人だったモノが近づいてきたのを感じたからだ・・

はあ、どうしょ。元の世界に戻る手立てが無い状態で倒していいの？

って感じなんだけど・・・

それにたぶん、この世界の原型となった世界ではなんらかのミスによりループが続いてるんだよね・・

車に展開してきた結界の効力無効化まであと1時間・・・

困った・・・

人の思いと絶望と希望の欠片

神棚の一件の後、結界を張りなおす為に車へと向って行くが・・・

「でもなんかこの世界っておかしい・・・何がおかしいって一言ではいえないけど・・・」

車の周囲に張ってある結界はまだ無事だったので再度張りなおす。

ガチャ・・・バタン

「薫さんただいま戻りました。」

「雪さん、とつても怖かったけど、桃花ちゃんがいたからがんばったよ。それで何かわかったの？」

「桃花ちゃんの一家と薫さんと俺が泊った宿屋の帳簿が10年前の日付で記載されていた事、そして残留思念の女の子の事、そして屍の種類などを説明した。」

そうすると、薫さんはしばらく考えてから

「ね、雪さん。私の勘違いなら良いんだけど、赤い海・異界・屍の種類・そして一人で若者が異界で戦うこれって私知ってるかも・・・」

「え？知ってるって何故ですか？」

「うん、少し前にね。どうあがいても、絶望。っていうキャチフレ

ーズで売りにだしたホラーゲームがあつたの。そのホラーゲームに今すごい似てるのよね」

「へーそうなんですか、でも主人公は逃げ惑ってるのがメインだからそこだけ雪さんとは違うかな？」

あはは、そうですね。私も異世界召還で鍛えられてなかったらどうなってたか・・・

とりあえず、この世界がもしかしたら、そのキャチフレーズを破壊する為に、人々の希望で作られてると仮定したら脱出する方法もあるかもしれない・・・

「で、どういうストーリーなんですか？」

『遙か昔に、異界より落ちてきた神あり、その肉を喰らいし者。不死の呪いを受ける。永遠の時の牢獄より神に操られ人の世界を脅かす事を至上とし神の復活の為に分かれた血を戻す為、自らの親族を捧げる。その際、一人の若者が立ちはだかり天使の剣をもちてその神を分かつ。分かれた神は別の時空の己とまた儀式を行う。』

「!？」

薫さんと同時にそっちを見ると、歌うように桃花ちゃんが口から咳いていた。

ま・さ・か・・・

《複写眼》にて再度、桃花ちゃんを見た。

解析 人の思いが形づくった希望の欠片

つまり・・・この子はゲームをしてたユーザーが作り出した断片なのか？そしてこの世界は、人の思いが作った世界・・・なるほど・・・おかしいって思ってた理由がやっと解けた

この世界は人の思いが作った擬似空間なんだ・・・

その擬似空間が現実に影響を与えて人を惑わしてそれを糧をして作ってる。

だから、ゲームを主軸のこの世界は構成されてるから日本の法律などには縛られない。生贄なんてことも平気でやるのか・・・

そしてあの儀式にいた際の女の形をしたナニカ

あれがこの世界の神かそれに従う者なんだ、明らかに他と違ったしな・・・

この女の子を保護して尚且つこの世界を構成するその擬似的神を倒せばクリアってことか・・・

ってことはBOSSの居場所なんだけど・・・

「薫さん、ゲームだとラストステージはどこにあるんですか？」

終止符そして始まり（前書き）

一連の発生した事件は、夢や希望・絶望が具現化した物であった。根本的には俺の使う魔術と一緒だ。だが、人を無差別にターゲットにするような物は許せない！
最後はビシッと大団団にまとめてやる。

終止符そして始まり

あの後攻略の仕方などを聞き、しばらく、風に乗り移動していくと・

説明を受けた六角家が見えてくる。

ここの屋敷に地獄インフェルノに通じる道があるらしい。

風の精霊を使い、屋敷そして地下をくまなく探していくと水鏡が見つかった。

原作だと、いろいろと手間暇かけてやらないと行けないらしいけど、そんな面倒な事をしてる暇はない・

大気中の精霊を存在の力で浄化し力へと昇華していく。

『大気に宿りし全ての精霊たちよ』

『全ての力を解放せよ！』

『天界を守護せし鳳凰の羽ばたきと化し』

『全ての存在を無へと帰せ！』

「れいはほつよくてんじん
《靈霸鳳翼天塵》」

膨大な浄化された風の精霊が屋敷をその地下にある坑道ごと全てを無に帰していく。

もちろんそこにあるモノ全てを含んで・・・

数瞬で屋敷が消滅し巨大なクレーターが残る。そこに水鏡が見え、ナニカが逃げ込んでいくのが見えた。

水鏡を通る為には、神の一部を宿してないと入れないらしいが・・・

眼を閉じて再度、眼を開ける！

アルファステイグマ
《複写眼》

水鏡の構成と解析していく。

解析完了。地獄を模造した世界へ通じる門 同眷属か自らのみは入る事の出来る世界

それを確認しながら、空中に魔法陣を展開していく。そして・・・完成。

簡単に言うならば力押しだ！

入れないなら空間を切り裂いて入るだけだ。

『悪夢の王のひと欠片よ』

『天空の戒め解き放たれし』

『氷れる黒き虚無の刃よ』

『我が力 我が身となりて ともに滅びの道を歩まん 神々の魂すらも打ち砕き』

足元から頭上にかけて発動魔法陣が展開されていく。

「ラグナ・ブレード
《神滅斬》」

力ある言葉と同時に手のひらに虚無が作り出せし神々すら撃ち滅ぼす巨大な黒い剣が現れる。

ラグナ・ブレードの影響により、すでに不完全なこの世界が亀裂を起して崩壊を始める。

大地が空が砕け散り始める。

「いけー」

水鏡に虚無の刃を叩きつけ、空間ごと斬りさく。そして切り裂いた空間に入っていく。

しばらくすると、何も無い広大な空間に出た。

地面から隆起する多数のモノ

そして倒れ付して動かないモノ

「ばかな？どうやってここに？」

一人の女性が他人事のように呟くのが聞えた。

「さあな？企業秘密ってやつだ・・・」

《俺は》はそう答えた。これからすることも含めて時間がないからな・・・

その女性に近づいていくと一人の男が日本刀を片手に近づいてきた。あれがキーアイテムか？

その男が手を上げると柱が地面からせり出してくる。

こっちは素手で向こうは得物持ちとか・・・

本来だと狩猟の銃で撃つらしいんだけど・・・そのまま俺は無造作に近づいていく。そいつが刀を上げて振り下ろしてきた。

俺はそのまま、刀を《硬気功》で強化してある手のひらで受け止める。まるで素人だな・・・剣筋も剣速も遅すぎて止まって見えた。そのまま握り・・・砕く。

なんか、浄化しないとイケないとか言ってたので、そのまま《火炎柱陣》にて焼き払う。

女性の方を見ると、驚愕の眼差しで見えていたが、本来の主人公のように呪いを俺が受けてなくても本来この世界のキーパーソンたる彼女がいない時点で紛い物の神を完全に復活させる事など不可能だったのだろう。

その女性は、自らを生贄とし神とやらを復活させた。

「なんか・・・龍の落とし子に翼生やしたようなやつだな・・・？」

「竜の眷属に近い気がするけど・・・」

そういう感想を抱いてると突っ込んできた。本来は見ることは出来ないらしいが、複写眼を使ってる俺には問題ない。

そのまま突っ込んできたそいつに向って

妖魔とか退治するならやっぱりこれだろ！

そのまま、墮辰子を指定（方囲）し定礎にて閉じ込める範囲を指定、

(結)！そのまま封じ込めた。

首を落とすループ確定らしいのでそのまま

存在の力で世界を騙し、奇跡を起す。

「《我が契約により聖戦よ終われ》」

意味の消滅。物質を無視して存在ごと問答無用で消し去った。

それと共に、地獄を模造して作り出した空間が歪み砕け散り始める。

俺は完全に消滅させた、堕辰子に力を与え復活させた女に近づき次元の崩壊の影響を利用してその女ごと跳躍した。

周りを見渡す。田畑の土が割れて農作物が枯れてるのが見える。

天武15年、西暦684年・・・簡単に言うるとタイムスリップつてやつ、この女の魂の根源を解析してそれを利用し魔術的に展開した魔法で時を超えたんだ・・・

どちらにせよ・・・この世界では俺は異物な為、長くはいられない・・・

すでに体は透け始めてるし・・・

しばらくすると、空からナニカが降ってきた。おそらくあれが墮辰子なんだろうな・・・複写眼で解析しても一致するし・・・

とりあえず、あんなのを野放ししたこの世界の神はどうなってるんだ？と思うが、今更言つまい。

墮辰子に向けて魔法を展開する。

『黄昏よりも暗き存在』

『血の流れより紅き存在』

赤い粒子が時の概念を逆らい集まってくる。

『時の流れに埋もれし』

膨大な力により防御魔法が作動する。

『偉大なる汝の名において』

『我今ここに闇に誓わん』

粒子が一つになって円を描く

『我等の前に立ち塞がりし』

『全ての愚かなるものに』

『我と汝の力もて』

『等しく滅びを与えんことを』

「これで終わりだ！ 《竜破斬》ドラク・スレイブ」

赤い閃光が、墮辰子を染め上げ滅ぼした。

しばらくすると、飢餓状態の村の人たちが集まってきた。

まあ、このままほって置くわけにもいかないからな……

まずやることは……

しばらくすると雨が降り始め、それにあわせて使用した魔法により作物が一瞬で収穫可能なまでの大きさまでに育った。

使った呪文は、天候呪文ラナリオン雨雲を呼び寄せるやつと素早さを上昇魔法の一部では植物促進魔法の（ピオリム）だ。

村人達はお礼を言っていたが、ほぼ見えかかっている俺が聞き取れるはずもなく、先ほどの青い月と赤い空があった異界へ戻っていた。

周りを見ると乗ってきたレガシィがあった。

ふと気配を感じて、そちらに眼を向けると先ほどの女性が微笑んでこちらを見ていた。

そして、八尾比沙子と呼ばれていた者が

「これで、過去の呪縛から解放放たれます。ありがとうございます。」

「

と言いながら光の粒子となって、消えていった。恐らく過去に戻ったのだろっな・・・

そして車の方を見ると、薫さんと桃花ちゃんがこちらを見ていた。

「雪さん、終わったの？」

と聞かれ、まあ、まだやる事はあるんだが・・・と思っただけど

「一応は終わった・・・あとはここから帰るだけだな・・・薫さんさつき渡したティアア会長のお守り貸し手もらえますか？」

「はい、これどうするの？」

と言いながらも渡してもらったお守りの中から2つの符を取り出す。一つは破邪の符・もう一つは次元座標を確定の符だ。そして次元座標の符を見ると、青く光っており、すでに座標が確定しているのが見て取れる。つまりこの符を介して空間転移の魔法を使えば元の世界に帰れるってわけ・・・

「それじゃ帰りますか・・・」

そついいながらも主の居なくなつた空間は崩壊していき、残りは青く輝く月と車を中心とした半径10m程度しか残つてない・・・

そのまま、存在の力を魔力へと変換し魔法を構築し発動。

「《リリルーラ》」

次元すら超えて合流できる魔法を発動させて、その場から消えた。

数瞬後、その場は幻のごとく全てが消えていった。

グランドフィナーレ(前書き)

やっと異界から脱出した。そして・・・

グランドファイナーレ

ちゅんちゅん・・久しぶりに車の走る音じゃなくて鳥の声で眼を覚ました。

・
どうやら、俺と薫さんは車の周辺に倒れて意識を失ってたみたいだ・

風の精霊の浄化魔法はすでに効力を失っていたが、認識障害魔法はまだ生きていた。

ふと、村があつたほうへ眼を向けるとそこには見渡す限りの森が広がっており、ポツンと材木工場だけがあつた。

俺達は材木工場に向う途中で寝ていた感じなんだが、周りを風で調べても霊的力場も何もなく普通の森になっているのがすぐに確認できた。

そして、風で感じた方へ眼を向けると、光の粒子になりつつある桃花ちゃんが見えた。

「なるほどな・・やっぱり桃花ちゃんはゲームをしていた人達が本当に救いたかったプレイヤーを具現した存在だったって事か・・・」

俺が桃花ちゃんにそう言つと

「うん、雪お姉ちゃん。ありがとう、今までたくさんの方が巻き込

まれてちゃたけどね、お姉ちゃんが根源自体を消してくれたから巻き込まれた人みんなね元の世界に帰れたの。ありがとう。」

「まあ気にすんな・・・それよりもう大丈夫なのか？」

「うん、たくさんの方の希望や思いは解き放たれたからもう大丈夫。」

「わかった・・・またな・・・」

「うん、またね・・・」

そう言いながら、夢と希望の欠片の女の子は光の粒子となって消えた。

「うん。」

そう言いながら薫さんが起き上がってきた。

「雪さん？戻ってこれたの？」

「ああ、本当に全部終わったよ。」

「そう、あれ？桃花ちゃんは？」

「元の世界に帰ったよ・・・」

「元の世界？って・・・」

その娘の名前は桃花。菊池 桃花という名前らしい。調べたところ、父親の名前は菊池健太郎。帳簿にあったとおりだろうか？」

「まあ村自体消えていますから帳簿とか言っても意味はないですけどね。」

「そうだな。その菊池夫妻の証言によると山道に迷い、気がついたところが例の村だったって事だ。本来予約を取るはずだった宿舎の電話をなんらかの因果により捻じ曲げられて村に誘導されたらしいと推測されるが、夫妻も気がいたら10年前のキミ達が寝ていた場所に子供と夫妻3人で車の中にいたらしい。村に入ってから宿に止まったところまでしか覚えてないらしいが逆に良かったのかもしれんな」

「桃花ちゃんについては記憶が残っていたらしく、高校を出てからずっと君と薫くんを探していたらしい。助けてもらったお礼として助手をやるそうだ。」

「そうですか・・・よかったですね。」

「でも、なんで今回こんなに危険だとアーカムでは分かっていたのに自分の娘を危険に晒したんですか？」

「娘はな、私によく似てなかなか強情だからな。探偵という事柄上、こういう裏も知っておいたほうがいいだろう？それに一度危機的状況に陥れば次回から依頼主をきちんと調査してから仕事を請ける癖もつくしな・・・それに今回は君の力が借りられたから許可を出したんだ。君が居れば大抵は解決できるしな・・・少しは期待してるん

だ。」

「わかりました、それならすぐに金一封くださいね！もちろん今回の危険手当込みで！！今回みたいな状態に陥って20万とか安すぎですよw」

「まあ検討しておこう。あと娘が君に会いたがったので今度言ってくれ。それと今回発生していた行方不明者は全員、発見する事ができた。警察から感謝状が本来出るんだが・・・極秘って事もあるの。今回は其れを揉消しておいた。」

まあデスヨネー

「それでは、帰り道こっちによつてくれ。受付に渡しておくからな
ブツ・・・ツーツーツー

と携帯電話の通話が切れた。

その携帯電話を握りしめながら、先ほど見かけたゲームの攻略本をBOOKOFFで見かけて巻き込まれた異界の事を考えながら、

「人の空想や夢や絶望ってのは、どんなときでも《希望》を求めてるんだな・・・」

一人で呟いた。

空には青い空と白い月が映っていた・

グランドフィナーレ（後書き）

更新終わりました。

作者は、本当にホラーゲームが苦手です。何か怖い話を聞くと夜、窓の外とか部屋の中で明かりが届かない所に恐怖を感じてしまいます。

今回はSIREN というホラーゲームを題材にしてみましたのですが、資料集めしてる段階で何回挫折しかけた事か・

以前ストーリーを見たときに、キャラクターの皆さんが悲惨な結末に終わってしまったのを見てハッピーエンドに終わらせる事が出来ればと日本人てきな思考で書いてみましたけど、文才に乏しくてまだまだでした。

こうしたらいいよとかアドバイスがありましたらドシドシ書いておくってください。

それでは、詠んで頂きましてありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9369t/>

青い月

2011年6月17日11時27分発行